

※ 考生請注意：本試題不可使用計算機。請於答案卷(卡)作答，於本試題紙上作答者，不予計分。

一、閱讀下面的文章，請分別寫出第一段和第二段的大意(共約 100 字)。(25%)

明治期「言文一致體」とジェンダー

絳や小森の世代の「国語革命」への関心に先駆けて、『文体』一書を編んだのは前田愛と加藤周一である。前田愛はいち早く明治期の「国語革命」に関心を抱き、岩波書店が企画した「日本近代思想大系」全二十三巻のうちに『文体』一巻を置くというかつてないアイデアを抱いた。が、志半ばにして刊行前に死去、その遺志を加藤をがひきついだ。

明治期の「国語」が、山の手の東京弁を中心とした薩長土肥藩閥政府の地方語をいくらか組み込んだ人工的な言語であることは、よく知られている。加藤の解説に寄れば、今日用いられている書記法が成立する以前は、句読法や引用符、一人称単数の主語の用法なども確立していなかった。今では「方言」として知れる地方語のなかでは、一人称の単数と複数とはしばしば区別されなかったし、また性別関与的な主語の用法も一般的ではなかった。…

(上野千鶴子 2003 『上野千鶴子が文学を社会学する』朝日文庫 p.15)

二、文章翻譯(日翻中)。(25%)

「台湾で米田校長はじめ下門先生、安田先生が行った教育は、すべてが時代に迎合したものではなかったはずである。これは先生がたにとって崇高な精神と生涯の情熱を傾けた神聖な事業であったにちがいない。しかるべき誇りと満足感を持たれていいのではなかろうか。持たれて初めて、私たち一日本の近代化を経た台湾人—は浮かぶ瀬があるのである。でないと、私たちは日本時代に身につけた学問知識に積極的な意義を見つけることができなくなる。こういう私は日本人に甘えすぎるのだろうか。いや、私は責められるべきは植民地体制そのものだと考えている。個々の人間にはあまり罪がない。…」

(王育徳 2011 『昭和を生きた台湾青年』草思社 p. 114)

三、下記の引用文を読んだ上で質問に答えてください (25%)

凡そ社會を改造せんと欲する者は、社會生活の狀態如何を明かにせざるべからず。既に能く社會の實狀を明かにせば、之を解決する所以の策は必ずや續出窮まらざるべし。然し現今の社會は所謂資本主義の社會にして、現今の文化は所謂資本主義の文化なり。而も現社會は日に其の矛盾の深刻化を招きつ々あること、我臺灣大衆の深く體驗しつ々ある處なり。吾が臺灣民衆は資本主義國の統治下に屬し、其の現狀を認識する者は何人も之に満足する能はざるべし。

(背面仍有題目，請繼續作答)

即ち社會制度の不備に困り強弱貧富の懸隔甚だしく、社會生活は益々不安の境地に陥りつ々あり。之が解放の道を求むるは蓋し當然の道なり。吾等若し人類の全歴史を通覽せんか、必ず能く社會を一貫する進化の必然の法則を明瞭に為し得べし。而して舊社會の破綻は皆現代大衆の力に頼て捕救さる。此の歴史的使命は固より吾等其の責を辭する能はざる處にして、茲に大衆文化促進の意義あり。

—「大衆時報社設立趣意書」、1927 年
 （臺灣總督府警務局編『臺灣總督府警察沿革誌第二編—領臺以後の治安狀況（中卷）臺灣社會運動史』、1939 年、221 頁）より—

問：引用文中の「舊社會の破綻」とは如何なる社会状態だろうか。「大衆文化」ともあるが、それは具体的に如何なるものを意味しているのか。また、社会の「進化の必然の法則」が強調されているが、それは如何なる考え方に基づいているのか。できるかぎり引用文の歴史的文脈にしたがって簡潔なマンダリンを用いて答えてください。

四、下記の引用文をわかりやすいマンダリンに訳してください (25%)

（植民地台湾における）白話文と漢文の關係について考えてみたいが、この両者が決定的に異なり、また対立するものだという見方は、いわば五四運動の中で形成された見方であつて、實情としては、新聞の文章などは半文半白の混合文体が普通であつて、漢文のリテラシーは白話文のリテラシーにも通ずるところがあつたと考えられるのではないか。大陸では文言と白話の対立は、いわば軍閥勢力と国民革命勢力の政治的対立とリンクするものであつたから、それゆゑ妥協することのできない、敵対的対立となつた。だが台湾ではこの両者は共に日本語という共通の敵を持っており、両者の違いはいわばこの強敵に抵抗するための方途の分岐にすぎなかつたともいえる。

—松永正義『台湾を考えるむずかしさ』、
 研文出版、2008 年、82～83 頁より—